

ひびきによるゆるし

数ヶ月前、全世界に発信されたというある出来事を、テレビのニュース番組で紹介していました。それはイランでの出来事です。一人の若い青年が、殺人の罪で死刑宣告を受けました。そして死刑執行の数日前、この青年が最後にどうしても自分の気持ち(悔いた気持ち)を遺族に伝えたいと申し出、それが承諾され、遺族と対面することになりました。

彼は遺族の前に出て一切の言葉を発することなく、ある楽器を奏で始めました。この楽器こそ、折れた一本の竹から生まれたといわれる「ネイ」というペルシャの伝統楽器の横笛です。かつてペルシャ人は、現代の楽器のルーツとなる数々の楽器を発明しましたが、その中でも彼らが「シャー」(王様)と呼ぶ楽器が、このネイです。

罪を犯したこの青年の人生最後の選択は、ネイを吹くことでした。そして彼が奏でるネイのひびきをじっと聞いていた遺族から、信じられない声があがったのです。「彼を生かしてほしい。彼を死刑にしないでほしい。私たちは彼をゆるすから。お願いだから彼を生かしてほしい」遺族のあまりの強い訴えに、なんと当局は死刑を見送り、青年の処罰を再検討するという、いまだかつてない異例の処置を取ったのです。

遺族はこの青年によって、愛する家族を失い、心を引き裂かれるような痛みと悲しみに覆われたでしょう。しかし、自分たちを最も傷つけ、悲しませたこの青年に生きることを願い、ゆるしを宣言するまでに至らせた力が、一本の細い笛が奏でるひびきの中に働いたのです。人間のメッセージや行い、イズムでは絶対になしえない何かが、ひびきの中にはある。

私は以前から、ひとつの確信がありました。憎しみによる争いをくり返すイスラエルとパレスチナ。あらゆる手段、政策をこうじて、もはや彼らに和解の余地などないように思えます。しかし、激しく敵対する彼らの中に、互いに心から共有できるものがひとつだけ残されているのです。それがひびきです。

特に、彼らの打楽器のひびきに対する思いは、特別なものがあります。私は数年前、ちょうど同じ時期に大阪で開かれた、イスラエルから来たシナゴーク賛美隊のコンサートと、エジプトから来た国立打楽器団の二つのコンサートに行く機会がありました。信仰、民族、文化の違いはあっても、同じ種類の太鼓が使われていたのです。そして同じひびきでした。

私自身、今までにもユダヤ人、パレスチナ人、そしてアラブ人の前で、子羊の群れの太鼓曲をさんびしたことがあります。それを聞いた時の、彼らの平安とよるこびに満ちた表情を、私は忘れることはできません。どの人たちも本当に感激してくれました。

私は、子羊の群れのさんび曲に、中東の伝統的な打楽器が使われることの神さまの願いが、ここにあると思います。彼らに本当の和解と平和、そしてゆるしをもたらすことができるのは、ひびきでしかない。あがないの愛を奏でるひびきの中に、神のわざが働くのです。

私はニュース番組でネイの話聞きながら、天のさんびが十字架のあがないのひびきであると言われていることに、あらためて深く感動しました。私たちがあがないの愛を信じ、キリストをさんびする時、全地に向かって十字架のゆるしといやしを宣言するだけにとどまらず、私たち人間が痛み、傷つけてきた(今も傷つけている)すべての被造物から、ゆるしの告知を受けるのだと思います。

私たちは自分たちの利益や快適のため、あらゆる動物、生物、そして木々や草花など、彼ら被造物が生きるための環境を破壊し、死へと追いやってきた。南極の溶けていく氷に生きる場所を失い、滅んでゆく白熊たち、アフリカの大地で砂漠化にのみこまれてゆく緑の植物。痛み、傷つけられた被造物は声に出さなくても、私たち人間を激しい怒りをもって訴えてきた。しかしその被造物が天のさんびのひびきを聞く時、私たち人間に向かって、ゆるしを宣言するのです。そして、被造物自身も、それによって深いいやされるのです。

天のさんびのひびきには、あらゆるものに和解とゆるしを告知させる力がある。私たちはひびきによってゆるす者であり、かつゆるされる者なのです。人知では計り知れない完全な和解といやしが、天のさんびのひびきに成るのです。

かつ、被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである。
(ローマ 8:21)

人類も被造物も、ゆるしという栄光の自由に入る望みがまだ残されている。私は信じます。望みは、天のさんびのひびきの中にある。カギはさんびにある。あがないの愛のひびきが、地の果てまで届けられますように。